

次は葛野郡太秦、花園を中心とする映畫製作事業にして阪妻、日活、帝キネ、千恵藏（以上太秦）マキノ（花園）等の諸撮影所檐を並べ此等従業員は數千人に及び、年産額一千數百萬圓に達し我國第一の映畫街を作り眞に東洋のハリウッドの名に背かない。

尚西方西院、太秦、梅津、京極の諸村に涉る一帶は舊市西ノ京、壬生方面と連續する一大工業地區をなし製絲（日本クロス）晒木綿、友禪等の諸工業盛んである。

其他東方山科方面も近時各種工業發展し鐘紡を始め大小工場百五十餘に及び其産額七百數十

萬圓の多きに達し京都工業地帯の一飛地の觀がある。
最後に編入地域全體に於ける生産總額を示すと左の通りである。

生産總額（單位萬圓）

編入地別	總額	農産	畜産	林産	鑛産	水産	工業
愛宕	一三六	一四	八	五	—	—	一三六
葛野	五八三	一四	三七	二四	三	—	三五〇
紀伊	三、六六	二七	四四	一六	一三	—	三四三
宇治	八六六	七四	九	二六	—	—	七五五
計	五、四七	四〇〇	一〇八	七三	一五	—	五、四六一

（未完）

簸川平野の民家

岡義重

斐伊川三角洲地方を主として調査した農家住宅の一斑であつて、名稱には特に方言を訛音の

儘附記して置く。

（一）屋根

先づ草葺と瓦葺との割合を見る。

出東村八五〇戸中草葺五七〇戸(六七・〇六)

瓦葺二八〇戸(三二・九四)

伊波野村大字富村一二七戸中

草葺 八二戸(六四・五七)

瓦葺 四五戸(三五・四五)

妻伊川以西は西部に到る程瓦葺が多く見られる概して新しい聚落は瓦葺を増す傾向であつて、出東村を二分して得た數字は次の如し。

草葺戸數

本田部三七七(六八・八〇) 一七一(三一・二〇)

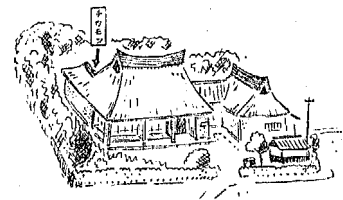
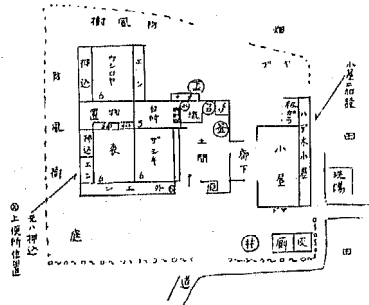
新田部一九三(六三・九一) 一〇九(三六・〇九)

(1)草葺 クジャと呼ぶ。米作地であるから藁のみで、萱も使ふが麥稈は大社方面に幾分あるのみである。構造は全部四阿でこれを四平葺と呼ぶ。棟には反を有し兩端が鋭角をなして上つてゐて、水平の棟は極稀である。棟の左右破風の部分に三角形の烟出穴をもつてゐる。一部には是へ簡單な狐格子(木又は竹を斜交した一邊二尺位の三角形)をあげて居る。烟出穴をもたぬ坊

飯川平野の民家

主棟と言ふのは農家には全く見られない。昔は軒まで一様に藁葺(フキオロシ)として居たが、

第一圖



(家嶋西村野波伊) 宅住形類舊

次第に瓦庇(シコロ)附に改良されて、平野の西半は殆んど總鑑附である。古い屋根は四阿葺下であると共に、チウモンと稱する小棟を後方へ出しその部が納戸となつてゐる。本棟より一段低く直角に出て三平葺である。これは平野の東半に未だ幾らか残つて居るが西半には全くない構造で、次第に瓦庇等に改造されて行く。

(2)箱棟。草葺四阿の上に箱棟をあげるのは先づ

上流で數も多くはない。大抵萱葺で、その上に切妻瓦葺の小屋根を附ける。この瓦棟が直に草葺を掩はず一尺位の間隙があり左右へも一尺位長く出てゐる。箱を附けぬから正しくは瓦棟である。是には鋸附が多く、チウモン附は全くない。

(3)瓦葺。新築又は農家以外は殆んど瓦葺で、大部分附近に産する黒瓦を使ふ。石見産の赤瓦(油瓦)もあるが出東村では黒二五八戸に對し赤二二戸で近村も畧それ位の割である。構造は切妻(二平葺)が第一で入母屋(妻造)等各種がある。平屋鋸附が最も多く農家に二階建は殆んどない棟には來待石材の棟石をあげ、棧瓦葺のみである。樓烟出を附けた家も相當多い。

(二) 間 取

(1)作小屋 宍道湖畔の新田には稀に極めて小さい掘立小屋が見られる。一例を示すと九尺二間の切妻葺で四壁を葦で圍ひ南面に入口と二尺の硝子戸とを有する。全體の半分に高さ一尺の床を設け葦が三枚敷かれ繩不入・寝具・行李等か

ら茶碗籠までその隅に置並べられてある。入口に葦を吊り土間には形ばかりの竈二つがある。これらは分家又は移住の當初の住居で作小屋又は假小屋と呼ぶ。この原始的な生活も可なり永續して愈母屋を建築する迄に約十年も辛棒する事があると言ふ。

(2)小作農住宅類型

(イ)母屋。平野全體の家が南面するが家相上「巽にふる」と言つて南南東を最佳として居る。平入であつて座敷を全體の右にとり、左に土間・入口のあるのを普通とする。是に反する間取を左座敷と呼んで少く、農家の妻入(小平入)も殆んど無い。

註 この地方の街村には却つて妻入を見る。

山陰道沿道の概數左の如し。

庄原町妻入六九戸 平入 七一戸

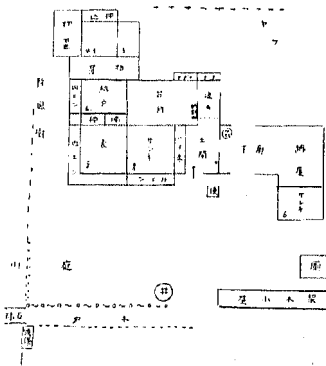
直江町同 七一戸 同 一三八戸

岩野原及直 二六戸 同 四二戸

江驛附近 座敷は高二尺位の板床で、前面に三尺の縁が附

き、六疊二間をとり、後に臺所・納戸が並び、土間が約二間通りでその一部が流しとなつてゐる表には上手全部に押込があつて、それを外す様にした取込入疊と言ふ間取もあるが今は多く内縁附の入疊になつた。次の間(ザシキ)六疊が常の居間で冬期は一隅に炬燵が出される。昔は土間からの上り口に建具もなかつたが今は板戸が

第二圖



(例一第3ノ二)

近時は硝子戸等に改良されて來た。東向に坐つて焚く竈と焚木入場とがあつて其の横に水甕等が置かれる。納戸(ウシロヤとも呼ぶ)には押込・鼠不入等が設けられ一部が物置となり、東に

建ち二尺

位の箱段

が附く。

臺所や流

しの北側

は戸棚等

で全く明

りを遮つ

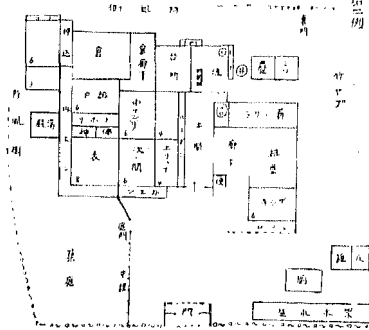
てゐたが

開いて二尺位の内縁が附く。これ等の各室が昔は葎敷のみであつたが今は吳座が多くなり表のみは疊敷となつた。天井も簀子張であつたのが板にされてきた。土間(ウシノ)は全體を泥土で打堅め一隅に大竈がある。流しは石敷かセメント塗の一坪餘で直ぐ外に下水溜(タナヘシ)がある。猶味噌部屋を設け五右衛門風呂が築かれてゐる。

(口)納屋及び廊下。外ごなしの出來ぬ出雲の天候の爲に米の調製・藁仕事等は全部納屋(コヤ)又はマヤ・ナヤで行ふ。正面から見ると妻入の形になつて母屋の左方二間位出して建つ。古い物は草葺四阿で全體土間である。今は殆んど牛馬を飼はぬが昔は厩も設けられて居た。最近は母屋より却つて壯大な瓦葺二階造が建てられ一方を座敷として養蠶に使用される。母屋との間には四坪位の廊下があり此處が家の前後への通路となる。全部土間で仕切なしに納屋の土間に續く未だ納屋を持たぬ家ではこの廊下に相當する建物のみで濟してゐる。

(ハ)便所。小便所は昔は上ゲ便所と言つて椽

第三圖



の左端入口の側方にあつたが今は全く母屋の左隅に移された。大便所は宅地の南東隅に別棟とする。肥料・農具

置場を兼ね、溜桶(多雨にて畑等に置かぬ)も設けるので重要視され、瓦葺切妻に白壁造等が多く見られる。

(ニ)架木小屋。簸川平野の稻架は甚だ大きくそれに特殊な杉丸太や竹を使ふ。この材料保存に架木小屋を建てる。五六尺に五間位で瓦葺切妻の壁をつけぬもので時には納屋の側方に加設されてゐる。

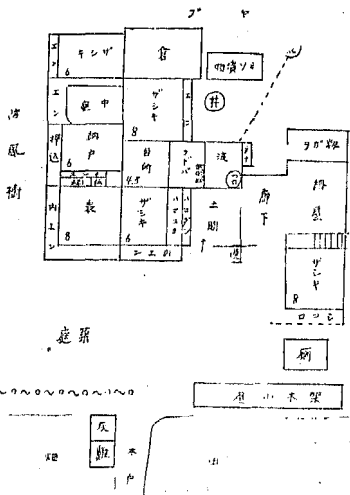
この外には家によつて灰小屋、雞舎等が見ら

れる。

(3)自作農住宅

第一例(伊波野村今岡家)母屋は瓦葺妻總鉾附大正末年新築である。五十年位の瓦葺納屋や倉代用の二階建が附屬してゐるが、間取から見ても各室が特に廣くされてゐる。

第四圖



(例三第3ノ二)

第二例(出東村今岡家)藁葺四阿徳鉾附の古い母屋に瓦葺總二階建の納屋、倉、後座敷更に湯殿、疊置場が建てられてゐる。室数が甚だ多く却つて臺所や土間が狭くされてゐる。

第三例（伊波野村井上家）藁葺四阿總鑑附の母屋に最近新築の瓦葺切妻總二階建納屋があつて前二例の中間と言ふべき間取である。

(三) 宅 地

廣さ（平均）は純農村の出東村二〇五坪、久木村二〇八坪八、僅少の街村をもつ伊波野村一七〇坪四である。宅地は一般に高く更に家の床を上げてゐる。これは低濕と水防に因るもので湖畔近くに土手跡聚落の出来るのもこの爲である。殆んど水田のみの中に散在する聚落で全く制限を受けぬから宅地は矩形を基本とするが固より一定せぬ。四圍に垣を作る。一般に前方を生籬（山茶花、鼠モチ等の刈込）にし他を結垣（竹枝、雜木）とする。南中央に門口をつけ道路まで

木戸を通ずる。多く門を建てぬから農繁期には竹一本を横たへて全戸不在の事がある。西及北側に防風林を持つ事は既に釜川平野の築地（地球第十二巻第四號）で詳述したから省畧する。表の前方に松を中心とした築庭がありザシキの前に僅かの花壇が見られる。靱干は全然せぬから庭の空地は甚だ狭い。井戸が門口近くか或は臺所の裏にあるが瀘過せねばならぬ水が可なり多い。近くに川があつて必ず洗場（アラヒト又はカケダシ）を持つ。宅地に接してゐる墓地が相當あるが昔は宅地内に埋葬した様である。冬から暫らく藁塚が風趣を添へる。徑七八尺の圓柱狀に積上げ同じ藁で圓錐狀の雨覆をしたもので各戸に數個は築かれる。（結）

新譯 日本地學論文集 (一一)

ライマン——日本油田調査第二年報 (八)

秋田油田 阿仁から予等は流れに従つて下り

再び加護山を過ぎ米代川河口に近い秋田縣鶴形